

カの花

復旦日記 2016年9月 吉永英未

修士論文について

ここ復旦で過ごす、最後の一年がとうとう始まった。まずはわたしの留学の集大成になるであろう修士論文について。

修士論文に対して、今までのカの入れ具合が2パーセントだとしたら、現在は80%のところまできているのではないかと思う。大学の食堂でいろいろ買い溜めでは冷凍し、宿舎から一歩も外に出ずに論文に取り組んでいる。冷凍食品を食べ続け、パソコンに向かい続けた。その結果ついに論文構成を自分の手で書きあげた暁には身体中がしびれていた。

このような状態に入れたのは、恩師のお叱りと、先輩の励ましであった。お叱りを受けて、励まされて、私はやっと本気になることができた。現在中国語で10万字を越える文章を書いたわけだが、これから大掛かりな修正と改正が必要である。

バドミントンの試合への誘い

復旦でバドミントンを始めて、三年目となる。入学してすぐに参加した試合で三位入賞してから、私にとってバドミントンはひとつの娯楽であり、情熱を注ぐものとなったことは間違いない。それからというもの、勉強がついていけない、もしくは自信がなくなると、バドミントンに逃げていた自分がいた。

少なくとも体育館のコートの中では、自分を表現することができる。そして周りの人も私を認めてくれる。そんな気持ちの中に浸っていた。もちろん、バドミントンで出会った友人は少なくなく、彼らとの友情はかけがえのないものである。彼らとは勉強についても哲学についても、人生についても語るすることができる。

しかし、だんだんと気づき気づかされてきたのは、学問に向き合うとからずっと逃げてきたことである。たしかにバドミントンでは、自分を大きく表現することができるのかもしれない。

でも私は、バドミントン留学に来たわけでもないし、向き合うべきものから逃げたところで結局問題は解決できていないのである。友達との会話、自分との会話でそのことに気づいた私は、だんだんとコートから離れていった。健康のための適度な運動程度で、友達に誘われてはバドミントンを楽しんでいた。

9月中旬。バドミントンの試合に出てくれないかと大学から声がかかった。私の気持ちは複雑だった。それには遡らなければならない過去がある。

修士1年時、バドミントンに闘士を燃やしていた私は、復旦大学を代表して大学チームに入れることを心待ちにしていた。そして、チームの練習の日には毎回顔を出して、機会があればチームのメンバーと打っていた。しかし、チームの雰囲気、チームメイトの態度は「熱烈歓迎」というものではなく、私が頼んだから打ってあげるといような雰囲気だった。コーチも私の存在はあまり気にしていなく、いてもいなくても変わらないといような感じを肌身に覚えざるを得なかった。

そのことに気づいた私は、はっきりいって「居づらく」なり、自然とチームから抜けていった。それからというもの、チームのメンバーと打つことはなくなり、チームが占領するコートの傍らコートで、他の友人や先生方と打つ日々が続いた。それから二年の月日が経っていた。

そんな過去もあって、今年度に入って突然の試合への誘いを素直に受け入れることができなかった。「これまで二年間、私を空気のように見ていたのに、なんで今頃、しかも卒業準備に忙しくなった時に試合に誘ってくるのだろう。」私は彼らに歓迎されず、コーチにも見て見ぬふりをされ、雑草のように育ってきたのだ。今更プライドの高すぎるチームに戻りたくはない。そんな気持ちが胸からずっと離れられなかった。様々な感情がこみ上げ、断ろうと準備していた。

そんなある日、地下鉄に乗っていたときのこと。地下鉄が地上に出て、暗い景色が一気に青い空と立ち並ぶビルに変わった。私はふと、気がついた。プライドが高いのは、私のほうだということ。チームのメンバーに嫉妬したり、コーチに不満を抱いていたのも、他の誰でもない、私の方だということ。心のわだかまりが、さっと溶けたような気がした。

そして私は、もう一度だけ、大学のチームに、微力ながら力を貸そうと決意したのだ。チームのメンバー、コーチとのわだかまりをとり、雑草のように育ってきた私の、本当の姿をもう一度見て欲しかった。以前は勝ち負けにこだわりすぎていたのかもしれない。で

も、いまはもっと大切なものに気づくことができた。そんな私をもう一度みてほしかった。

バドミントンに時間を割くことができるのも限られているため、私は団体戦だけ参加することにした。10月22日、復旦大学を代表して初めての外部の試合に参加することになる。しかし、私には心の中に決めていることがある。

それは、道徳を持ってバドミントンをするということである。試合に負けてもいい。しかし、どんなときも道徳を捨ててはいけない、そう心に言い聞かせた。この決意には、高校生の苦い思い出まで遡ることになる。

努力の花

『努力の花』は私が高校三年時、校内スピーチコンテストに出場したときのスピーチ原稿のテーマである。私は高校の三年間を、青春を、情熱を、すべてバドミントンに捧げた。寝ても起きてもバドミントン。その魅力に、完全にとりつかれてしまった。私がバドミントン部に入ったのは1年生の中で一番早く、また中学時代陸上部だった私は、フットワークも人一倍速かった。

初心者のため、初めのうちは羽を打つことができず、素振りとフットワークを半年間続けた。憧れの先輩がコートで活躍する姿をみて、自分もいつか先輩のように輝きたいと、どんな努力も惜しまなかった。

気が付くと、同期のメンバーは全部で12人になっていた。笑いが絶えない、最高のチームメイトにもなっていた。しかし、校内戦が近づくとそのような友好的な雰囲気も一変してピリピリとなった。校内戦では、チームメイトと戦い、その結果レギュラーになれるかどうかが決まる。みんな試合に出るために必死で練習し、校内戦に臨んだ。

私はというと、試合で勝つことができない。。。過去何回かの校内戦で勝ったことが一度もない。それどころか、新しく入って何ヶ月目の人にも勝利を譲ってしまう。そんな自分が悔しくて、強くなりた一心で、部活の練習が終わると、自転車を父の車に積んで、車の中で母の作ったお弁当を食べ、地元皇徳寺小学校で夜間練習をした。

私は体力だけは、自信があり、中学2年時には20メートルシャトルランは男子に劣らず108回、高校のロードレースでも4位入賞した。その体力を頼りに、手当たり次第バドミントンに打ち込んだ。

しかし、試合となるとどうしても勝つことができない。「こんなに努力しているに。。。」そんな自分への焦りと、チームメイトへの嫉妬、コーチに認めてもらえない悔しさなど、3年間幾度も涙を流しながら長田川沿いを自転車で帰った。

努力しても、努力しても、試合に勝つことができない。私はその悔しさを、いつしかチームメイトにぶつけてしまった。「私はこんなに努力しているんだ」そんなことを言わんばかりに、強情になり、八つ当たりした。

そんなある日、部活のミーティングの場でなんと私の「批判大会」が開かれたのである。

大切なはずのチームメイトが、一人ひとり、私に対する不満を打ち明けた。

私は、思いもせぬチームメイト11人からの批判に、自然と涙が溢れていた。がむしゃらになりすぎて、まったく自分の姿を見ることができていなかった

。そのため大切なチームメイトを、言葉で、行動で、傷つけてしまっていたのだ。私がこの集団にもたらした悪影響は計り知れない。こだわっていたのは自分の「勝利」だけで、相手の気持ちを考えることなんてまるで頭になかった。

自分はこんなに努力しているのに、誰にも認めてもらえなくて、惨めで、悔しい思いをしているのは自分だけなのだと、思い込んでいた。

道徳の欠片もなく、人間としての資格もなくなりかけてた私は、チームメイトからの厳しい指摘に、気づかされた。最後に彼らは、「私たちはえみを傷つけないのではなくて、えみに変わってほしいだけなんだよ。」と言った。

高校最後の引退試合。個人としては初の三回戦まで出場することができた。試合会場には、母も駆けつけてくれ、私の最後の試合を見届けてくれた。

団体戦にはレギュラーとして参加することができなかったけれど、これまでの自分の努力に、悔いはなかった。

私は、自分も試合に出ているつもりで力のこもった応援をチームメイトに送った。共に汗を流し、努力してきた仲間と一緒に笑顔で引退することができたこと。私にとってかけがえのない宝物となった。

「努力は必ず報われる」と簡単に言うことはできない。私は三年間努力して、努力し続けてきて、結局レギュラーになれたことは一度もなかった。結果だけを見るとそうかもしれない。

でも、高校三年間で流した汗と、涙と、唇を噛み締めた思いは、10年たった今でもはっきりと覚えている。そして、仲間が教えてくれた何よりも大切なこと、人を思いやる心、その後もずっと胸に刻んでいる。

ひとつのことに捧げる情熱、それは、どんなことに対しても無駄にはならない。たとえば成果を残すことができなくても、がむしゃらに努力したことは、きっと自分自身の力になっている。

高校時代、私がバドミントンに注いできた情熱は、のちに英語捧ぐ情熱になったり、中国語になったり、そして論文になったり、形を変えて私の原動力となり、背中を押してくれた。あのとき諦めず、努力してきたことは、自分だけがしっかりと覚えている。

そして、無駄な努力はないのだと、どんなときも私に教えてくれるのだ。

大学を代表して、試合に参加することが決まってから、大学のチーム内で練習することになった。しかし、私は、これまで通り一緒にバドミントンを楽しんできたチーム外の仲間と打つことを、やめてはいない。

初心者の人たちに教えることもやめていない。

彼らは、私を心から温かく受け入れ、これまで一緒に歩んできた仲間である。勝ち負けは、コートの中だけで決まるかも知れない。でもコートの中だけでは決められないものがある。

大切なのは、名誉やプライドではなくて、そこにいる一人ひとりを思いやる気持ちなのではないか。試合の有無に関わらず、大学を代表するチームメイトであるかないかに関わらず、私が大切にしたいのは、あの時見失ってしまった、しかし一番大切な気持ちである。そんな心をもって、これからもバドミントンを楽しんでいきたい。

あっという間に過ぎてしまった9月。中国は今、国慶節に入り、7日間の大型連休となっている。みな半袖を着ているほど、秋はもったいぶってまだ上海には来ていないようだが、北京から来た友達は、北京はもうかなり肌寒くなったと教えてくれた。

先日は深夜3時まで、図書室の友達と、ボランティアをする意義から哲学、人生、平和について語り合った。時間を忘れて、語り明かした。

人はみな、社会から認められたいと思っている。みんな、自分の居場所を探している。みんな、様々な悩みや思いをもって生きている。たったそれだけのことを確認しあうだけで、すごく楽になれた気がした。

その日の夜、私はぐっすりと眠った。

2016年10月4日 吉永英未